

NJ 素流協 News

平成21年3月25日 第51号

平成21年3月25日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

第4回国産材利用拡大推進協議会

第四回国産材利用拡大推進需給協議会が、三月十八日、農林会館会議室において開催された。下山理事長による協議会長挨拶の後、協議がなされました。



一、原木等需給動向の見通し
 (二) 素流協の出荷実績状況と今後の見通し

昨年度から今年度二月までの合板工場への出荷実績は図のとおり

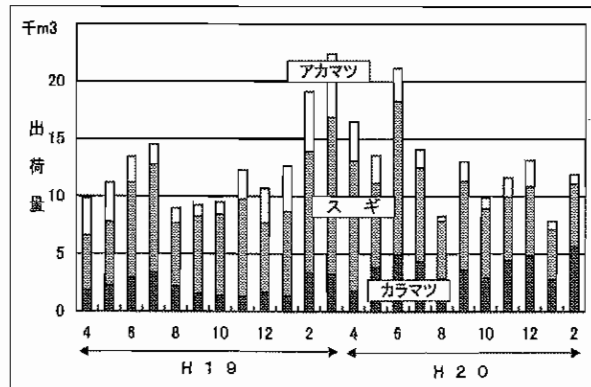


図1. 月別出荷量の推移(ホクヨーP、北日本P合計)

ある。
 今年度三月の出荷量は、ホクヨープライウッドへは六、〇〇〇立方メートル、北日本へは四、五〇〇立方メートル、石巻へは、セイホクが受入停止で、西北プライウッドへ三、〇〇〇立方メートルを見込んでいます。
 また、集材用等の合板工場以外へは、三〇〇立方メートルを見込んでいます。

三月の総出荷量は一、三八〇〇立方メートルとなると見込んでおり、今年度の総出荷量は、十七万立方メートル強となると思われる。
 なお、石巻の二工場には、今年度十一月から受け入れてもらい、総出荷量は九、五〇〇立方メートルとなっている。
 年度当初の計画量は達成できないが昨年度実績量は超えるだろう。
 今年度の特徴は、ホクヨー、北日本への樹種別出荷割合に工場側の受入調整の影響が現れており、カラマツの比率が、両工場ともに大きく(三〇%)なっていることである。
 四月以降の出荷については、合板工場側の受入次第になるものと思われる。
 (二) 合板工場の需要動向と今後の見通し
 合板製品の需給状況は十二月から月を追うごとに悪くなり、二月に一回値上げを打出したが、現在それも消えて、全く収益の無い状態が続いている。

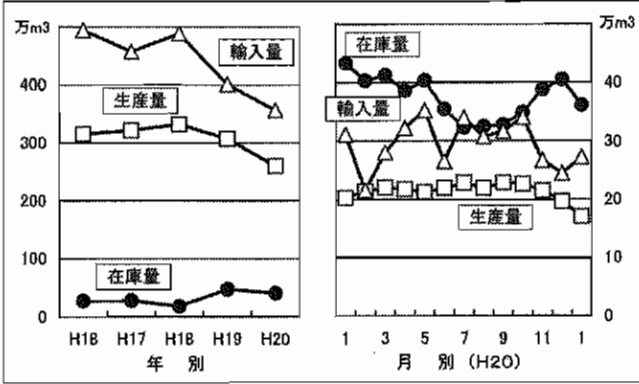


図2 普通合板の生産量等の推移

各社とも減産体制で、在庫を一掃しようとした傾向が見られ、在庫量は一月、二月と減ってきているが、十月以降厳しい状態が続いており、四月になっても無理した在庫量が続くことになる。在庫量が一掃されて初めて価格の若干の持ち直しができるのではないかと。

合板市況は過去七年間の最低価格となっており、作るほうも、売るほうも苦しい状態にある。特に、スギの落ち込みが厳しい。

厚物合板の厳しさがスギの受入量に大きく影響を及ぼしている。価格面では、北洋材は一時価格がかなり安かったが、中国での旧正月明けから価格が上昇し、北洋材を買い入れるには厳しい状況にある。反対に、米材価格が下落しているがこれも米国の経済事情によって変わるだろう。

国産材の比率は、減産体制の中でもホクヨーでは六五%、北日本では五五%を保っている。この比率は、来年度も同程度の数値となるだろう。

国産材の在庫量については、ホクヨーでは一・五ヶ月分まで減らし、更に、安定供給がなされるのであれば一ヶ月ぐらいいまで落としたいと考えている。

現在、二か月分の在庫量があるので、今は使用量よりも若干受入量を落としている状況である。

このような受入を五月までお願いして、それ以降は状況を見て判断したい。

また、北日本では国産材の使用

量を年間五〜六万立方メートルと予想しており、その在庫は使用量と入荷量が釣り合っており、在庫も常に約一ヶ月のサイクルで続いている。

カリヤの工場も大変厳しく、かつて五万五千〜六千坪の製品を作っていたものが、今は三万坪ぐらいしか作っておらず、国産材の利用面で貢献できていない状況にある。

二、全国的にみた素材生産事業体の動向

全素協より全国的な木材需給状況と国が進めようとしている「間伐材チップの確認のためのガイドライン」の紹介説明がなされた。

三、素流協の組合員からの話題

(一) 素材生産状況

合板工場での受入調整があるので在庫をつくらないように生産を控えざるを得ない。

また、針葉樹の売れにくいことから広葉樹の比率が高まってきている。

特に、スギについては動きが悪

いので、取扱量を少なくして、広葉樹の伐採に変えてきている。

これから先の立木の仕入れをどうするか、判断に迷っている状態である。

一方、森林整備を主にやるようにして、素材生産を控えている業者もいる。

(二) 低コスト、機械装備等の取り組み

三〜四年前より機械装備は若干増えており、ほぼフル稼働している業者が多い。

一方、針葉樹材の流れが悪いことから、機械導入を控えている業者もいる。

機械の償却費よりも人件費の方が大変であり、これからはやはり機械化しなければならないだろう。

ザウルスロボ（バケット機能とグラブプル機能を併せ持つアタックチメント、H19林野庁委託開発製品）を導入した業者は、作業道を作りながら伐採木の集積ができるので、非常に効率よく行っている。

低コスト作業となるので、今後普及するだろう。

四、岩手県からの話題

県産材の利用拡大を進める二十一年度事業として、「森の国いわて木材流通拡大促進事業」ほか二事

業が紹介された。

五、その他

来年度も本協議会を継続実施することが確認された。

伐出用林業機械講座 (3)

(2)集材機

エンジン、動力伝達装置、ドラムなどを備えた一種のウインチ(巻上げ機)で、ワイヤーロープを使用して、林地に散在する伐倒木を集める機械である。架線部分も含めて呼ぶことも。

我が国では、大正元年に初めてアメリカから輸入した蒸気式集材機で架線集材が行われ、大正十年に国産の集材機が製作された。

昭和三年にガソリンエンジン付の集材機が輸入され、これを原型として改良された国産が製造されたり、小型のウインチが輸入されたりして木曾地方の国有林から全国各地へ広がるようになった。

終戦後、国産の集材機の軽量・小型化が進み、わが国の地形条件に適

した独自のものへと発展してきた。

集材機の分類は一般的にエンジン出力とドラムの数により行われる。

集材機を用いた架線集材は架設と撤去に多くの労力を要することから、一つの架線であるべくおおく集材できるように架設位置や集材範囲を計画する工夫が必要である。

集材機本体と元柱を一体化して架設、撤去に要する作業時間を短縮し、移動性に富む、タワーヤードが平成二年前後に登場し、短距離や小面積の集材に使用されるようになった。

集材機の保有台数の推移(図1)は、エンジン出力十馬力以上の大型集材機、十馬力未満の小型集材機とともに、平成年代になって以降

は、エンジン出力十馬力以上の大型集材機、十馬力未満の小型集材機とともに、平成年代になって以降

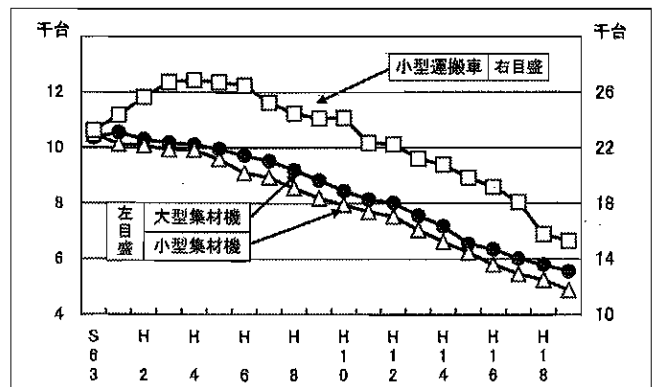


図1 保有台数の推移

毎年減少してきており、平成十九年の保有台数は、平成当初の五〇パーセント前後となっている。

近年では集材機が使用される作業現場も少なくなってきたが、路網の作設が困難な急斜地や奥地林、国土保全の必要な箇所では有効な搬出手段であり、その技術の継承と改良が必要である。

(3)小型運材車

小型運材車とは、森林内で主として間伐などの中小径木材を荷台に積載して集材する作業車のこと

で、林内作業車とも言われる。

木寄せや積込みのためのウインチやクレーンと支柱を備えたものが多く、ホイール式とクローラ式の二タイプがある。

積載可能重量は約一トン(〇・五〜二・〇トン)で、フォワーダ(グラップルクレーン装備)に比べると、運材能力は劣るが、個人的に使うには丁度よい大きさであり、小規模な素材生産に向けた機械である。

幅の狭い作業道でも作業が行えるので、路網の作設費用を低く抑えることが可能であり、また、車両幅が狭いために間伐作業にも適している。

小型運搬車は、昭和三十年代初めに国産のものが開発されて以降、開発や改良が重ねられてきて、その普及台数(図1)は、平成三〜六年頃をピークとし、以降、毎年減少しており、現在の保有台数はフォワーダの普及により最高時の約五五パーセントとなっている。

第六回（平成21年度）
通常総会・報告会
開催のお知らせ

と き…平成21年5月15日（金）

通常総会 14時30分

報告会 16時00分

と ころ…ホテルメトロポリタン盛

岡ニューウイング



一葉 広葉樹 (6)

▽根

樹木にとって根はきわめて重要な部分であり、その働きは大きく二つある。

一つは養分・水分を吸収する働き、もう一つは地上部を支える働きである。

根は地中にあり、目に触れる機会が少ないので、その調査研究は地道になされてきており、各樹種の根の特性が今でもあまり判明していないのが実態である。

根の区分法も各種あるが、その一つを紹介する。

(一) 根の形態

地表に沿って水平方向に伸びる根を水平根、斜めの方向に伸びる根を斜出根という。

また、地中深く下に向かって伸びる根を垂下根という。

水平根と斜出根は根株から分岐するものが多く、垂下根は根株または水平根から分岐するものが多い。

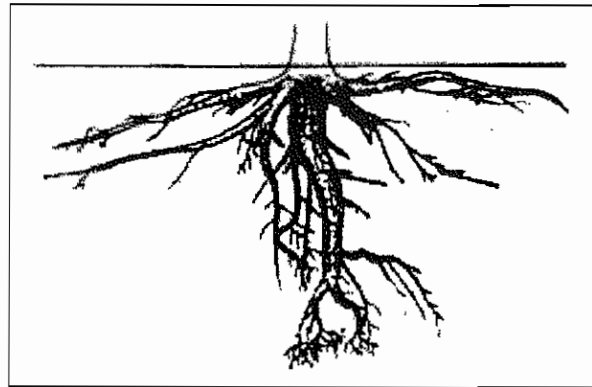


図 根の形態(模式図)

(二) 根の垂直分布

根特に細根が表層近くに多く分布するものを浅根型といい、地中深くまで及ぶものを深根型といい、両者の中間程度のもを中間型という。

深根型では深さ六〇センチメートル以上に凡そ十五%以上の細根が分布する。

(三) 根の水平分布

根特に細根が根株近くに多く、広がりの小さいものを集中型、広

範囲にわたっており、広がりの大きいものを分散型という。中間程度のもを中間型という。

表 根の分布特性

		水平分布		
		集中型	中間型	分散型
垂直分布	浅根型	ヤマモミジ、ハウチワカエデ、ハクウンボク	イタヤカエデ、エゾヤマザクラ、ハンノキ	ハルニレ、ナナカマド、ポプラ類、トウヒ類
	中間型	カンボク、ニシキギ	シナノキ、シンジュ	プラタナス、ニセアカシア、カラマツ
	深根型	カツラ、ミズナラ、クリ、イチイ	ヤチダモ、キハダ、トチノキ、イチヨウ	シラカンバ、マツ類

冗談欄

「ワシは行く」と言ってみたい

遂にロボットも人間の心が判るようになったらしい。

その人間の脳波を感じて、意志に従って動かし、寝たきりや病気で動けない人達の役立ちとして期待されている。

その名は、二足歩行ロボットの「あしもクン」。

一方、近頃「ワシも族」も話題になっている。

ロボットではなく、定年で毎日が日曜日状態となったお父さん。家でやることもなくゴロゴロしており、奥さんがどこかへ出かけようとすると、「ワシも一緒に行く」と付いていく老年男性をこう呼ぶらしい。

「ワシも族」にならないための方法は、「自立する」か「妻より早く旅立つ」ことである。

小生は「ワシも行く」ではなく、「ワシは行く」と言ってみたい。

この「も」と「は」のたった一字の違い、意味するところは大きいである。

でも、そう言うのと、「どうぞご勝手に」と言われそうで怖い。

平成21年2月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を先月と比較すると、スギが約1,760m³、カラマツが約3,110m³、アカマツが約110m³増大し、全体で約4,980m³増大している。また、昨年2月と比較すると、スギが約3,680m³、アカマツが約4,370m³減少し、カラマツが約3,000m³増大して、全体で約5,050m³と大幅に減少している。工場別ではホクヨープライウッドが先月比較で約2,570m³、昨年2月比較で約8,500m³減少、北日本プライウッドが先月比較で約1,490m³、昨年2月比較で約1,300m³増大している。これら増減の主原因は、工場側の受入調整によると考えられる。また、石巻2工場への出荷量は先月比較で約920m³増となっている。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は先月より約1,910m³増となっている。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は先月より約320m³、昨年2月より約370m³増大している。
- 3 年間計画量に対する21年2月までの目標出荷量の割合（目標達成率）を91.7%とすると、今月までの出荷状況は合板用、その他（合板用以外）及び計の出荷量は目標を10%強下回る進捗状況となっている。

(m³、%)

樹種	長級	販売先				計	累計				
		合板用					計	合板用	その他	計	
		ホクヨー プライウ ッド(株)	北日本プ ライウッ ド(株)	セイホク (株)、西北 プライ (株)	小計						樹種別割合
スギ	2.0	2,177	2,413	926	5,516	578	7,428	60,076	57.3	5,557	90,606
	4.0	408	448	478	1,334			24,973			
	計	2,585	2,860	1,404	6,850			(1,028)			
カラマツ	2.0	3,819	627	543	4,989	41	6,421	31,236	29.8	1,309	45,592
	4.0	677	498	214	1,390			13,047			
	計	4,496	1,126	758	6,380			(33)			
アカマツ	2.0	0	840	0	840	0	840	17,276	12.8	13	19,045
	4.0	0	0	0	0			1,756			
	計	0	840	0	840			(0)			
その他針 広葉樹		0	0	0	0	16	16	0		526	526
		0	0	0	0	106	106	0		591	591
合計		7,081	4,826	2,162	14,069	742	14,811	[1,419] (8,109)	100.0	7,996	156,359
目標達成率								79.8		80.0	79.8
計画量								186,000		10,000	196,000

長級2.0には2.1を含む () はシステム販売取扱量(内数) [] はストックヤードからの出荷量(内数)

落穂拾い

大ベストセラーになった「バカの壁」の著者・養老孟司氏は、東大名譽教授(医学・解剖学医)であるが、この人の趣味は「虫」で、それも専門家と言われてもよいほどの虫博士で昆虫収集家である。

彼がある新聞に、今われわれが住んでいる時代、すなわち「現代」について次のような意味のことを書いていた。

《虫の世界に異変が起きている。奄美大島あたりにいたチョウが、鎌倉市でも毎年育つ。これは温暖化の原因であるというのがあつうの解釈のようである。

虫にはいったい何種類あるか。少なく数える人で五百万種、多く数える人で三千万種。一口に虫の世界というけれど、とてつもなく複雑である。

その中の一部の変化を見て、一言で異変とか温暖化だと片付けてしまふ、その単純さに「現代」を見る。世の中の現象で理由がないものはない。しかしその理由が一つとは限らないのである。

さて、都会は単純な世界である。それでも都会に住む人はその複雑さに右往左往している。

とくに、自然に比較すれば単純である。もし都会が複雑で田舎が

単純だと思っているなら、それは目が悪いだけのことである。極めて複雑な模様だつて目が悪ければ単純に見える。現代人は目が悪いのである。》

小生はこの話を読んで、自分は目が悪いのだと気がついた。なぜなら「都会は複雑で、田舎は単純」と考えていたからである。

東北地方の小都市に住む者としてこれまで、「住みやすいところではあるが、都会から見たらずーっと単純・平穩なところ」と思召して、独り安寧の中に浸っていたようである。

これからは眼をしっかりと開いて自分の周囲や地域社会の事物・現象の中の複雑な模様を注目してみようと思う。

でも、もう遅いかな、悪くなった老人の目ではムリかも知れない。養老先生は、こうも言っている。

《中国野菜の残留農薬が問題になる前に、スーパーで買った小松菜を飼っていたバツタに食べさせたら、バツタが全部死んだという話を聞いた。人間は虫より丈夫なのである。》

小生は、「お前は、目が悪いばかりか、虫よりも鈍感だね」と言われてるように感じた。

いずれにしても今頃気がついて遅すぎるね。 合掌。